

[生物工学会誌 第83巻 第4号 192-196. 2005]

シリーズ 米国のバイオ事情

—ベイバイオのホットスポットより—



連載開設によせて

室岡 義勝

今、バイオテクノロジーは生命科学の飛躍的進展によって、世界的なブームとなっております。民も官も国を挙げてのバイオ推進政策に乗り遅れまいと新造船に殺到しています。この新造船は“にわか造り”でありますから、tsunamiによって難破しないとも限りません。Tsunamiが来ると言う情報は多すぎて、どれを信じてよいか分かりません。適切な情報が必要です。このような状況の中で、川瀬、梅本両氏によるバイオベンチャー講座が生物工学会誌に連載されました。まさに時期を得たもので、多くの学会員を魅了しました。

この度は、世界で最も進んでいるといわれる米国から、今そのベイエリアで活躍中の企業トップの方々から直接その熱い思いを筆にさせていただきます。米国バイオは西海岸に移ってきています。簡単に米国のバイオ関連（主としてメディカルバイオ）への2003年の投資を要約しますと、以下のようです。

■米国のバイオメディカルベンチャーキャピタルによる投資総額は5兆ドルであり、そのうち43%はカリフォルニア州にある企業に投資された。その内訳は、生命バイオに57%、医療デバイスに43%の投資であった。

■バイオメディカル企業(NASDAQ上場)の総市場価値

の54%は、カリフォルニア企業によるものであった。

■現在、カリフォルニアのバイオメディカル企業の約78%が商業化段階にあり、残り22%は研究開発段階にある。82%の企業は製造設備を州内に持っている。

■カリフォルニア州のベンチャーキャピタルによる投資額はライフサイエンスに2,310億円、ソフトウェアに1772億円、半導体に847億円といったように、バイオに突出している。

カリフォルニア州のバイオクラスターは、Genentech社やChiron社に代表されるサンフランシスコを含むベイエリアが最大であり、従業員数85,600名、バイオメディカル企業699社、研究施設31施設となっている。これに続いて、ロスアンゼルス(それぞれ47,500名;322社,22施設)、オレンジカウンティ(31,300名,317社,世界最大の医療デバイスクラスター)、サンディエゴ(27,800名,502社,18研究施設)、ベンチャーラ・サンタバーバラ、内陸、サクラメントとなっている。これらは、バイオメディカル企業の統計であり、そのほかデータベースを中心としたアグロバイオ、バイオケミカルのクラスターもある。

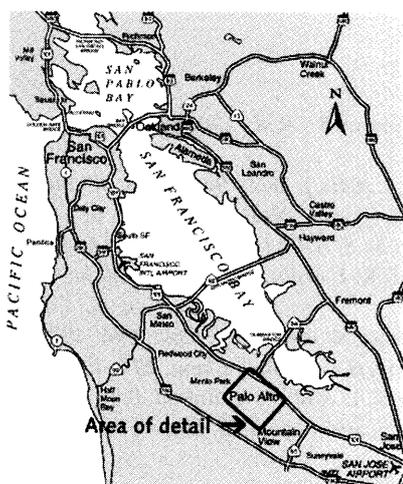
ちなみに、大学発バイオメディカルベンチャー数は、スタンフォード大学発が一番多くて、117社、ついでカリフォルニア大学バークレー校発87社、同大サンフランシスコ校発79社、スクリプス研究所発45社、UCLA(40)、CalTech(28)、UC Davis(26)と続いている。

こんな統計上の数字を並べてもおもしろくないので、実際にベイバイオのホットスポットの中で活躍されている企業のトップのお話を6~7回に渡ってお聞きするのがこの連載企画である。執筆者の皆さんは、米国に永住されている方々であるが、毎月のように日本にも出張されている。この連載を機会にご講演をお願いするのでもいいだろう。連載企画は以下のようである。

1) 八木 博 (IMCA America Inc. 本部長)

シリコンバレーのバイオテクノロジーと人財の動き

2) 榎本博之 (B-Bridge International, Inc. 社長, Avocel社 COE)



著者紹介 Osaka University, San Francisco Office (Executive Director)
E-mail: murooka@bio.eng.osaka-u.ac.jp

日米バイオの架け橋を目指して

- 3) 橋本千香 (Gallus, Inc. 社長)
米国で活躍している製薬企業
- 4) 金島秀人 (東京大学シリコンバレー事務所長)
日本が目指すべきバイオの方向
- 5) Cho Hyeon-Je (Verdia, Inc. Staff Scientist III)
植物バイオベンチャー企業の研究員として
- 6) 松原弘行 (丸紅アメリカ Co., Department Manager)

米国に見る医薬開発と在宅医療技術の実例

- 7) 星野岳穂 (日本貿易振興機構日米ビジネスインキュベーションセンター所長)
米国のバイオ戦略の行方
タイトルは執筆者のお考えで変更があるかと思いますが、米国からの苦労話と今後日本がどのようにあるべきかをうかがえるものと期待しています。

シリーズ 米国のバイオ事情 —ベイバイオのホットスポットより— (第1回)

シリコンバレーのバイオテクノロジーと人財の動き

八木 博

筆者は、2001年に三菱化学㈱を早期退職し、技術系人財紹介の老舗、イムカ㈱の米国拠点、イムカアメリカ社に転職した。シリコンバレーを拠点として、日米のバイオテクノロジーの人財にかかわる仕事をして、早いもので5年目となった。日米を毎月のように往復して優秀な人財、元気な企業やスタートアップの会社とお付き合いしながら、バイオ関連の人財の転職という分野に特化した職業紹介をしている。正直なところ転職というのは、一人の人生の中での重要な節目であり、人財も企業も(そして私も)それぞれにとって難しさもあるが、転職に成功された方々の活躍を聞くときに、やっけていて良かったと思う。この間の経験からそれぞれの個人が持つ素晴らしい素質と、それを生かす環境の大切さを痛感する。今回は、そんな経験を基にしたシリコンバレーと日本のバイオテクノロジー発展の背後にある、人財に焦点を当てた報告をしてみたい。

シリコンバレーはアジア人の割合が高い

シリコンバレーと呼ばれる場所は、サンフランシスコ

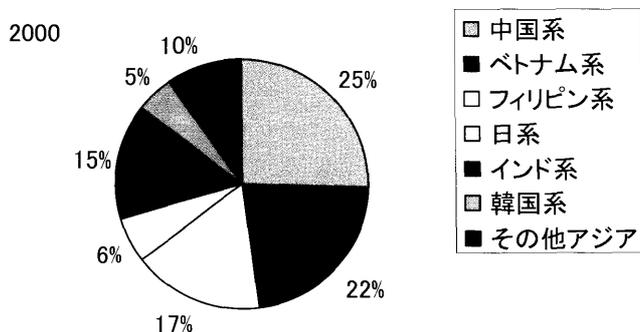


図1. シリコンバレーのアジア人の内訳
(出典 San Jose Mercury News 2001)

市とサンノゼ市に囲まれた狭い地域である。サンフランシスコ湾(ベイ)に沿ってあるので、米国ではベイエリアとも呼ばれる。気候は温暖で、米国の中でも白人居住者が半分以下という特異な場所である。アジア系、中南

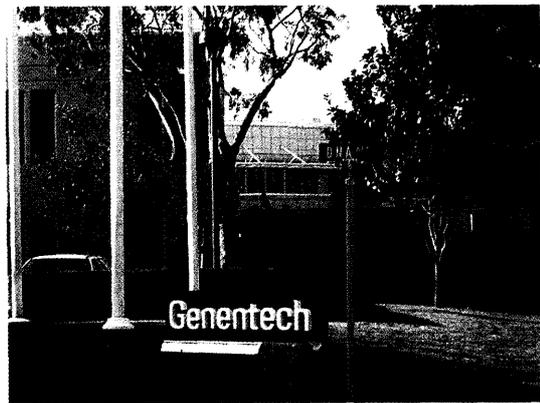


写真1. GENENTECH 社本社. 1 DNA way, South San Francisco



写真2. バイオテック発祥の地の看板. 南サンフランシスコ市の道路。

著者紹介 イムカアメリカ (Executive Director), 東京大学 (Silicon Valley, Office Partner)
100 Hamilton Ave., Palo Alto, CA94301, USA TEL. +1-408-368-6082 FAX. +1-650-289-1001
E-mail: hyagi@imcaamerica.com